

満洲引揚げ文学について ― 研究史の整理及びこれからの展望 ―

崔 佳 琪

Abstract

This paper summarizes the earlier studies of the Repatriation Literature & Memoirs and redefines the Repatriation Literature anew. Besides, it is pointed out that we need to find out the special features, unique characteristics, and fundamental essence of the Literature. Finally, it is suggested what sort of viewpoint should be taken for the research of the Literature of Repatriation in the future.

キーワード… 引揚げ、体験記、文学、実録

はじめに

日本の敗戦直前まで満洲国や朝鮮などの地で過ごし、敗戦によって外地での生活を中断して、日本に帰国した人々は、引揚者と呼ばれている。この引揚者の数は軍人と民間人を合わせて、六百万人を超えている¹⁾。民間人のうちに、六分の一を占めている百

万人余りが満洲国から引揚げてきた。

周知の通り、「満洲国」は建設の時（一九三二年）が唐突であったが、なくなる時（一九四五年）も唐突であった。満洲国に行った人にとっては、最初の「新天地」の夢を抱いて、開拓に苦勞したのに対し、夢が破れた後の「引揚げ」は、「開拓」より、より多くの苦難と戦い、より辛い経験をしたといえるだろう。このわずか十三年余りの短期間のうちに、この対照的な経験をしたことは、日本の昭和時代の歴史においても、珍しいことと言っても過言ではない。もし「開拓」のイメージを「希望」、「新生」、「協和」などと挙げるならば、「引揚げ」については、「失望」、「逃亡」、「苦難」などが挙げられるだろう。「引揚げ」に際しては、戦勝者側の暴力・襲撃、同胞同士のせめぎ合い、道中の不安・恐怖、家族との別れ、子供に対する使命感、日本人の分裂意識、社会的混乱など²⁾さまざまなことに直面しなければならなかった。引揚者たちは、前進すればするほどゆく手を阻むものが現れた。一日も早く祖国へ帰るため、彼らはこれらに対して、一つ一つ戦わざるを得なかったのである。

敗戦から現在にいたるまで六十年余り経った。各地からの「引揚げ」に関する研究は戦後まもなく一九四〇年代末から始まっている³⁾。しかし、これらの研究を見渡すと、歴史学・社会学による実態研究がほとんどであり、文学面における研究はまだ盛んになっていない。しかし、一九四〇年代後半から、現在に至るまで「引揚げ」を題材として、多くの文学作品或いは引揚げ体験記が

発表されている。文学研究の面においては、これを軽視することができない。これらの文学・記録は六〇年余りの間で、ほとんど絶えず発表されつづけている。「引揚げ」は終わっているが、「引揚げ」をどのように受けとめるのかについて、敗戦後六十七年を経た今日まで、体験者たちは引揚げ体験を言い尽くせないほど、ずっと語ってきたのだ。これはある意味でいえば、「引揚げ」は、まだ終わっていないのではないだろうか。どのようにこれらの文章を整理し、検討するのは、大きな課題となるだろう。

これらを研究することすなわち、日本の昭和文学における、「引揚げ文学」の位置づけを考えることは、なまなましい体験を後世に伝える二つの方法―実録と文学と―の関係を考えることである。更には、「引揚げ」の作家たちが戦後文学において、どのような活動をしたのかということも含めて、考えることになるだろう。

本稿では、満洲引揚げ文学を検討する前の段階として、今までの引揚げ文学全般に関する研究・論評を整理してみる。そして、私のこれからの研究の着目点と方向を展望する。この六十年余り前の日本人の大移動に対して、体験者たちはどのような目線でこの時代を振り返っているのだろうか。これについて丁寧にあとづけることから、自分なりの観点を確かなものにしていきたいと思う。

私は、引揚げ文学を考えるに当たって、引揚げを伝える体験記や引揚げを素材とする作品の目録を作成中である。今の段階はまだ十分ではないため、本稿では掲載しないこととする⁴。

さて、これまで、引揚げ体験記・文学作品を整理しようとする試みや論評する動きがなかったわけではない。次に私は、これまでの、体験記・文学作品を整理・収録したシリーズものを見直すことにする。これらの体験記・文学作品がどのように整理・論評されてきたのかについて、確認する。

まずは、いくつかの「引揚げ」体験記シリーズを振り返ってみよう。

一、体験記・小説のシリーズ

① 「昭和戦争文学全集」（一九六五年二月、集英社）村上兵衛解説

引揚げ体験記・文学作品を集成したものは、これが、最も早くと見られる。本シリーズは全部十五巻＋別巻からなっている。シリーズ名から見ればわかるが、全集は「昭和」の「戦争」時代にかかわる作品群である。これは日本の敗戦二十年を節目としたのであろうか、関連する文学作品を通して、昭和の戦争を振り返ったのである。戦争の時代の文学は当然だが、敗戦後の「引揚げ」にも、一巻分当てられた。シリーズの第十二巻が『流離の日々』という題名であり、引揚げ体験に基づいた記録・小説が十篇収録されている⁵。作品は次の通りである。私は各本文の内容を読んだから、小説か体験記かを後に添えてみた。

- ・ 武田泰淳『蝮まむしのすえ』(小説)
 - ・ 大岡昇平『俘虜記』(小説)
 - ・ 大日向葵『マッコイ病院』(体験記)
 - ・ 高杉一郎『極光のかけに』(体験記)
 - ・ 会田雄次『アロン收容所』(体験記)
 - ・ 佐藤亮一『北京收容所』(体験記)
 - ・ 平野零児『人間改造』(体験記)
 - ・ 藤原てい『流れる星は生きている』(6) (体験記)
 - ・ 森繁久彌『森繁故郷に帰る』(体験記)
 - ・ 鎌田正二『北朝鮮日本人苦難記』(体験記)
- 村上兵衛は巻末の解説の中で、次のように述べている。

一般的にいつて、戦場は一つの極限的な状況であるが、捕虜、引揚げ、総じて「流離の日々」には、さらにぎりぎりの人間体験が織成された。それは否応なく、いつそう深く異なる民族の生活と文化とを観察せざるを得ない機会であった。それは同時に、ばらばらになった日本人というものの赤裸々な姿を、凝視せざるを得ないときでもあった。それはまたしばしば、本能そのものとなった人間の姿を、思い知らされる日々であった。(傍線・崔。以下同)

村上は、引揚げの途中で引揚者たちが生死の境をさまよっている「ぎりぎりの人間体験」をしたとともに、異民族の文化を凝視

せざるを得ない状況にも追い込まれたのだたと述べている。この「凝視」は敗戦前の「支配者」の立場からではなく、お互いに赤裸々の姿で平等の立場に立って起こったのだろう。そのため、この「凝視」は人間の本能的なものに直面するせざるを得なかったと述べている。

十篇の中の四篇は、作者が兵士として捕虜となった経験によるものである。場所はそれぞれの通りである。

- ・ 大岡昇平——フィリッピン
- ・ 大日向葵——サイパン島
- ・ 高杉一郎——シベリア
- ・ 会田雄次——ビルマ

ほかの六篇は満洲二篇、上海、北京、太原、朝鮮各一篇である。このシリーズの編集者は作品を選択する時に、敗戦後のいろいろなところに生きること必死な日本人の実態を伝えようとしたのであろう。

この十篇をまとめてみると、作者たちが自分の体験したその「極限的な状況」をリアルに描いている。特に死と隣りあわせに生きる人間の記録として、より真実に迫る。また、捕虜・抑留生活の中では、異民族との接触が生まれたことも描かれている。作者たちはこの極限的生活を内部から強くささえている。人間に対する愛情と信頼のことを読者に伝えたかったのではないかと私は思う。

村上の解説は、引揚げについて、人間的な立場からとらえ直そ

うという文学研究の視点から考え始めたものだと私は思う。

村上の解説も含めて改めてまとめてみると、この十篇の引揚げの文学の中から、

(1) 異民族との接触

(2) 人間の本能的なもの

という大きな点が読み取れる。

② 生きて祖国へ（全六冊）、（国書刊行会、一九八一年）

これは、引揚げの「体験手記」のシリーズである。

シリーズの各分冊は、次の通りである。

- 1、満州篇（上）「流亡の民」
- 2、満州篇（下）「満州さ・よ・な・ら」
- 3、シベリア篇（上）「シベリアの悪夢」
- 4、シベリア篇（下）「望郷の叫び」
- 5、朝鮮篇「死の三十八度線」
- 6、樺太篇「悲憤の樺太」

本シリーズは、新聞を通じて⁷全国から募集した⁸引揚げ体験手記（文学作品ではない）の集成である。これらの手記の多くは「或る人は赤裸々に体験を綴り、或る人は激情を内に秘め淡々と当時を回想する」と紹介されている。このシリーズを企画・刊行した佐藤今朝夫は「発刊に寄せて」で、次のように述べている。

世界には数々の悲劇の歴史があるが、出版人の使命として、最も悲惨な一頁を加えたこれらの惨状と、幾千万犠牲者の慟哭を、後世に伝えておかねばならないと思ったのである。（中略）戦争は、生延びた者、死せる者、残された者のいずれにも深い傷あとを残していたのである。（中略）「忘れた頃が危険」という警句を、読者諸賢とともに心に刻みたいと切に願うものである。

一 出版者としての佐藤が、本シリーズを出版することにしたきっかけは、

- ・ 惨状と慟哭の記録化（および伝承）
- ・ 記憶忘却への警告
- ・ 不戦への祈り

である。

このシリーズは満洲、朝鮮、樺太三つの篇に分けられている。最初の二巻の「満州」篇（上・下）の上篇「流亡の民」は主に満蒙開拓団の最後と難民たちの逃避行について、語られたものであり、二十四篇が収録されている。下篇は敗戦後の満洲における混乱の街、收容所についての体験手記であり、さらに下篇では、北支と中支からの引揚げ体験手記も合わせて三十一篇が収録されている。そして、シベリア篇も二巻に分けられて、上篇は敗戦から抑留までの体験を中心とし、下篇は捕虜收容所の様子を描くもの

と帰国への途中の悲惨さを語るもので、それぞれ二十二篇と二十一篇がある。残りの五、六巻は朝鮮と樺太における引揚げ・抑留体験記が二十篇ごと収録されているから、シリーズ全体として、百三十八篇がある。

このシリーズの評価すべきところは、名もなき庶民のなまなましい体験を表現する舞台を提供したという点である。このような体験手記の集成を通じて、読者たちは引揚げの真実に迫り、各地方、各年齢層の引揚げ体験者の体験を窺うことができる。

③ 満洲叢書・祖国への道―(慟哭と感動の満洲引揚げ体験記) (全七冊) (国書刊行会、一九八三年)

本叢書は、戦後まもなく個別に発表された単行本の体験記を集成再版したものである。前の「生きて祖国へ」シリーズは、引揚げ地によって篇を分けているのだが、本叢書は引揚げ地を満洲に限定している。七冊はそれぞれ、一人の作者が書いた体験記である。

叢書の各分冊は、次の通りである。

- 1、流民 (初版・高橋是人『流民』(時代社、一九四九年))
- 2、瓦解 (初版・成田精雄『瓦解』(北隆館、一九五〇年))
- 3、苦力に変して (初版・北川正夫『ソ満抑留記』(大雅堂、一九四八年))

- 4、葫蘆島へ (宮下二郎著) (9)
- 5、脱出行 (初版・森文子『脱出行』(開頭社、一九四八年))
- 6、奪われても (初版・米塚英子『奪われても』(講談社、一九五〇年))
- 7、満蒙開拓少年義勇軍 (初版・山田健二『満蒙開拓少年義勇軍』(草加幼稚園、一九六七年))

「刊行にあたって」は②と同じく国書刊行会の佐藤今朝夫の執筆である。

私はこの惨憺たる歴史の真只中と、まさかの時に人間の内なるところに潜んでいる力とを、後世の人々に伝えんとして、この数年、終戦前後の満洲を夢中になって漁ってきました。

その総決算ともいべきものが本シリーズ「祖国への道」となったのであります。(中略)それぞれの体験が綴りなして、一つの「満洲国瓦解記」となり、「邦人引揚げの全貌」として読むことができるように構成しました。(中略)本シリーズを刊行するに際し、常に人間とは、祖国とは、生きるとは、を時^{ぼうだ}には滂沱の涙を流しながら考えさせられました。

②のシリーズと同じように、本叢書も「引揚げの全貌」を後世に伝えたいと述べ、個々の体験を通じて、全体的には「満洲国瓦解記」となるように、引揚げからみた深層的なもの、満洲国瓦解

にかかわるもの考えたとある。また、引揚げから、「人間」、「祖国」、「生きる」など、さまざまな人生に関わる重要なテーマを取り上げている。

以上、三つの引揚げ関係のシリーズ・叢書を紹介した。この三つのシリーズをまとめていうと、①は、最も早い引揚げ関係の文学・体験記シリーズであり、解説者は、引揚げ体験記や引揚げ小説が、人間はいかにぎりぎりの状態で過したのかということや、日本人がいかに赤裸々の有り様だったのかということを書いて語っている。②と③は体験記の集成であり、戦争が終わってから体験者たちがなまなく自分の戦争経験を語り、後世に歴史を忘れさせないよう、伝えようとする意が強い。

この三つのシリーズは引揚げの生の材料を後世に伝える使命を持つている。「引揚げ」という尋常ではない体験において、文学研究の視点からいえば、転換期における人々はいかに生き抜くのか、この過程において、いかに赤裸々の状態で他者を受け止めるとともに他者に受け止められるかなどの問題を見出すのではなからうか¹⁰。また、全体としては生々しい体験を後世に伝えようとの意欲に満ちているのであるが、①には体験記と文学作品が並べて収録されているから、実録的意欲と文学的創造精神との関わりを考えようと私の立場から言えば、①を具体的に検討することが重要な足がかりになると考えている。

ところで、ここ数年来の植民地文学研究ブームの中で、引揚げ文学の問題も次第に研究者たちに注目され始めている。これまで

の研究状況をまとめてみると、引揚げ文学についての研究は、一九七〇年代、引揚げ派作家を語るものから始まったのである。その後、一九九〇年代に入り、引揚げ題材の文学作品に対する研究の動きがあった。近年、「引揚げ文学」というジャンルを提唱する研究者も出ている。前の三つのシリーズを含めて、研究者はどのように「引揚げ文学」を見ているのかを把握するために、次に、これまで引揚げ文学に言及した論評・批評をまとめてみたい。

二、関係論評の整理

(1) 尾崎秀樹と川村湊

尾崎秀樹は戦後有名な文学評論家である。彼は台湾に生まれ育つて、敗戦後引揚げてきたのである。彼の『旧植民地文学の研究』（勁草書房、一九七一年）は、「満洲」、「台湾」、「朝鮮」など各植民地における文学について、検討・論評したものであり、一九六一年から一九七〇年までの間に発表した論評が収録されている。これは植民地文学を体系的にとらえようとした試みだと言ってもよい。引揚げ文学・引揚げ派作家については、「外地引揚げ派」の発言―歴史の傷痕とからみあう作家たち¹¹という評論で取り上げている。

この評論では尾崎は五木寛之の「外地引揚げ派の発想」（朝日新聞）一九六九年一月二十二日」という評論を読んだことをきっかけに、作家の「植民地原体験」から発想し、さらに引揚げ派作家

にとつての「引揚げ原体験」の意味を語っている。尾崎は植民地時代の日本人にとつての「異様な二重構造」を提示している¹²。「その体験は、ふかくこころに刻まれれば刻まれるだけ、胸の底に沈潜して、言葉にすることをためらわれる——そのような実感でもあったのだ。」と述べている。この「実感」は結局、作家たちの創作原動力なのではないだろうか。また、尾崎自身は引揚げ派の一人として、自分と同世代の作家たちへの共感を述べ、引揚げ体験を持つ作家たちという作家群を新たに認識すべきと述べている。

尾崎は、この評論の最後に、こう述べている。

日本は敗戦後二十数年をへた今日でも、まだ旧植民地問題についての精神的決算書をまとめてはいない。それは容易な業だとは思えないが、アジアの中の日本の位置を、旧植民地という分光器にかけてとらえなおす必要は、文学の場合にかぎらず重要なことなのだ。

〈私たちの世代の後遺症〉は、ふかく歴史の傷痕とからみあっている。

尾崎は旧植民地の視点からアジアの中の日本の位置づけ問題を考え直す必要があると記している。それは社会・歴史の面はもちろん、文学的にとらえ直す必要性も十分に認識すべきのだと述べている。言い換えれば、旧植民地問題の総決算は各分野の研究に

支えられて、文学研究も欠かすことができない一環だと指摘している。

さらに、この本のあとがき「遅すぎた発言」には、尾崎は自分の体験をこのように述べている。

私のなかで、自分はやはり日本人なのだ、といった自覚がなされたのは、八月十五日のことだった。

単なる敗戦体験といったものではない。このときの体験は、ふたつの意味で私にとつては重要なものをふくんでいた。

ひとつは自分もやつと日本人なみにあつかつてもらえるといった喜びであり、もうひとつは、私が育ってきた土地は、結局は日本の異国だったという思いにもとづくものだった。

引用の通り、引揚げ者たちは確かに敗戦によって、そのような微妙な立場に放置されたのである。これはまさに引揚げ者全体の心に起こった葛藤なのである。しかも、この「葛藤」は長い間、続いているのである。（次の本田のインタビューからも窺える。）

その後一九九〇年代に入り、「満洲文学」研究の代表者と見られる川村湊は、引揚げ派作家や、引揚げに関わる作品について、多くの論評を発表している。彼の「満洲文学」に関わる著書と論評は年代順に並べると、次の通りである。

ア・『異郷の昭和文学』（岩波書店、一九九〇年十月）

イ、『満洲文学』研究の現状』（『植民地と文学』所収、オリジン出版センター、一九九三年五月）

ウ、『戦後文学を問う』（岩波書店、一九九五年一月）

エ、『文学から見る「満洲」』（吉川弘文館、一九九八年十二月）

オ、『満洲国―砂上の楼閣「満洲国」に抱いた野望』（現代書館、二〇一一年四月）

『異郷の昭和文学』の中では、「V 子供たちの満洲」と「終章 見えない国境線」の章で、引揚げ及び引揚げに関わる文学作品などに触れている。川村は、当時の満洲に生まれ、育ち、そして引揚げてきた子供の視線から彼らにとっての植民地、戦争、引揚げとはいったい何であったかについて、作品を紹介しながら、問い直すのである。川村は三木卓、宮尾登美子、安部公房と木山捷平の作品を取り上げた。結論的なものとしては、満洲で生まれ育った世代が、「異郷としての故郷」に向かわなければならぬ体験をした世代であったと言うのである。

自分たちが故郷を目指していると思っていたのに、たどり着いたところは、やはり「異郷」にほかならなかつたという体験をした世代だ。これは故郷に帰りついたという彼らの父母や祖父母の世代とは、明らかに異なつた精神環境にあつたということだ。故郷を喪失した人たちの故郷。引揚げ世代の少年少女たちの「昭和」は、あるいは「戦後」は、そうした

異郷としての故郷から出発しなければならなかつたのである。

川村は「引揚げ」文学作品の特質を少年少女という独特の視点からとらえている。つまり、自分の生まれたところが「故郷」であるが、満洲に生れた少年少女は、時代に翻弄され、自分が育つたところではない「故郷」に戻らなければならなかつたと指摘している¹³。引揚げ途中の「少年少女」たちは上の世代との「祖国」に対するまったく異なる受け止め方を持っていたのである。知らないうちに、引揚げ体験はその時代の少年少女の心を傷つけていたといっても過言ではない。

そして、終章では、引揚げ文学も含めて、「満洲文学」の昭和文学における位置づけを述べている。

〈満洲文学〉は日本の近代文学、昭和文学の鬼子であつたというよりは、その嫡子であつたといふべきだ。昭和文学の一つの傍系のエピソードではなく、本気で演じられようとした真剣な舞台であつたと考えるべきだという立場から、私はこの本の主題をとらえなおしてみようと思つたのである。（中略）満洲の「開拓」と「引揚げ」という二つの現象は、昭和の日本人にとって、一つの「国」を造ることと、それを壊すことという、二つの未曾有の経験を強いた。それは「昭和」の前半という、特定の時期に限定された経験ではなく、

戦後——すなわち昭和の後半期においても大きな意味を持つていた。

引用から分かる通り、満洲国の「開拓」や「引揚げ」は、昭和の文学に極めて大きな意味を持っていると川村は言っている。

また、川村は「開拓」と「引揚げ」が昭和の後半期でも意味深いとまとめている。つまり、引揚げてきた少年少女たちが昭和の後半に生きて、自分のかつての体験を文字化して、後世に伝えたいと考えたのである。

川村のこの論評は、「引揚げ」に関わる文学問題を文学研究の視線で取り上げたものといえる。引揚げてきた少年少女たちには故郷の喪失とともに、国家や制度に対して、不信感が生じている。引揚げ体験が彼らに教えたことは自分自身を守り、主張するものといつてよいだろう。川村は、引揚げ小説を出発点として、ここから生じた個人と国家、異郷と故郷の問題を深く考えたのだと見られる。

次に、川村は『戦後文学を問う』の序章の最初の文で、「日本の戦後文学は、「帰る」ことから始まった」と、一言で日本戦後文学の出発点のあり方を示している。

敗戦にともない、日本の植民地、占領地に住みついていた人たち、そこで生まれ育った人たちが、戦場へ出征していった兵士たちは、みんな、日本へ「帰る」ことを考えざるを得なかった。つまり、戦争後、外地にいる日本人たちは一番直面しなければならぬ

のは「帰る」ことであった。したがって、これは戦後文学の語らざるを得ないテーマになったということである。

このほか、『満洲国—砂上の楼閣—満洲国』に抱いた野望』では、引揚げ関係の文学活動や作家を簡単に紹介する部分がある。川村の評論は「引揚げ」そのものの歴史環境や実態研究ではなく、引揚げ関係の文学作品の読解・検討に視点を置いている。彼は引揚げ作家による引揚げ文学作品に注目し、作品中の主人公を通じて、作者は人生におけるどんなテーマを語りたがったのかなどを検討し始めた。また、満洲文学の一環としての満洲引揚げ作品・小説の特質の問題も視野に入れている。

以上の尾崎と川村の研究をまとめてみると、尾崎は一九六〇年代末引揚げ作家を視野に入れはじめたきっかけに、引揚げ作家にとつての「引揚げ原体験」の意味を語っている。この「原体験」は作家たちの原動力になったと指摘している。この評論は尾崎の旧植民地文学関係の研究著書に収録し、尾崎がこの「引揚げ作家」の問題を植民地文学と関連付けて考えているのは明らかである。川村は、一九九〇年代初期、改めて「満洲文学」の研究を提起し、その中で満洲引揚げを題材にした作品を文学研究の視線で、検討してきた。また、引揚げの体験は日本の戦後文学の出発点との位置づけも改めて指摘した。尾崎が引揚げ関係の作家・文学の問題の糸口を見つけたといえれば、川村はこの問題をさらに深く掘り下げたのだといえよう。

（2）成田龍一

岩波講座『アジア太平洋戦争4』『帝国の戦争経験』（岩波書店、二〇〇六年二月）の中で、成田の引揚げに関する論評「引揚げと抑留」が掲載されている。ここでは本稿と関わる「引揚げ」の部分に注目したいと思う。

この論文では引揚げの実態¹⁴を細く検討している。「引揚げ」にはどのような「体験」があつたのかを、藤原てい、牛島春子、望月百合子の書いた満洲からの引揚げを題材とした体験手記（文学作品）から抽出している¹⁵。

藤原ていの手記について、全編を貫くのは、「母としての責任」である。この使命感と同時に遂行にともなう疲労や困難も表現していると成田はまとめている。

牛島春子の場合、小説作品群の形で、それぞれの引揚げの移動の過程を分節して描く。全編を貫くのは、敗戦後の「満洲」でかつての支配者であつた日本人が味わつたのが「恐怖」や「不安」であり、また、「移動」とさまざまな「暴力」である。これらが主人公をとりまく人間の有り様として描かれている。また、藤原と違うのは、敗戦後の女性たちのもつある種の「解放感」を記し、悲慘さを強調することはないと成田は述べている。

望月は、満洲の地に居住し、引揚げの当事者ではない視線から、敗戦前後の人々の様子を書きとめた。そして、ソ連軍の「暴行」、「略奪」を繰り返して記している。しかし、望月が批判したのは、ソ連軍の暴行だけではない。「日本人」の分裂も取り上げている。

そのため、望月は満洲に残留することを決意し、「日本人としての自信をすっかり失い果てていた」満洲にいる日本人を励ますところで、手記を終えた。

一九七〇年前後、東アジアの新たな政治秩序によって、「引揚げ」に関しては、あらためて考察し始める動きがあつた。と成田は述べている。その特色として、表現形式といえは、体験記にとどまらず、小説や詩、絵画なども現れたと示している。テーマにおける違いといえは、「戦後の日本を批判するまなざしを有し、しばしば、実存的な問いかけをおこなうことともなつた」と成田がまとめている。また、この時代では、尾崎も提示していた「植民地二世」のことを成田も注目し、朝鮮から引揚げてきた森崎和江のエッセイを取り上げている。最後のまとめとしては、森崎のような「引揚げ二世」が語ろうとするのは、「戦後」や「日本」の時間・空間への異和感であり、被害者意識よりも加害者意識を強調しているのではないかと成田が述べている。「帝国が行使した暴力に無関心な戦後社会」への批判意識は、この時期と一九五〇年代の体験手記と最も目立った特徴だと成田は主張している。

これらを考察した結果、これまでの引揚げ体験記の記述は、敗戦―戦後の秩序に相応する形で行われ、たんに日本帝国の敗戦にともなう「境界」の崩壊を表現しているとは言い難かった。と成田が指摘している。また、膨大な体験記の中では、「帝国と植民地体験の記述が少ないうえに、自覚的には記されておらず、なかなか帝国意識を払拭しきれていない」と結論づけている。

成田は、引揚げの実態を全体的に把握した上で、文学作品（手記）の中から、さまざまな様相を抜き出し、考察している。史実を確認してから、文学作品に基づき、文学における歴史事件の描かれ方を注目し、描写の中から、引揚げの有り様を見つめるといふ方法である。

ところで、成田の論文をもとにして、私は次のように自分の観点から、問題を設定したいと思う。

④ 取り上げた三人の作家（記者）の手記（文学作品群も含む）では引揚げ途中における女性主人公の描かれ方の相違点を指摘している。このような視点、問題意識は、文学研究においても、大いに参考になるだろう。

⑤ 三人の作家の手記（作品）を分析する際、藤原ていの「責任感」、牛島の「解放感」、望月の「日本人の分裂」とそれぞれまとめている。成田の指摘したこれらの作品中に現れた要素は文学研究にも参考できるだろう。私はこれらの問題について、さらに掘り下げる必要があると思う。例えば、主人公はなにゆえ解放感を生じたのか、この解放感は主人公にとってどんな意味があったのだろうかなど、文学的手法で検討できると思う。

⑥ 一九七〇年前後の引揚げ二世——森崎和江のエッセイについて、成田は「被害者意識と加害者意識における、後者の意識の強調である」と読み取っている。これまでの引揚げ二世に関する評論では、このような見解がなかった。この認識を踏

まえて、引揚げ二世の書いたものの独自性についても、改めて検討する必要があるだろう。

以上の三点の通り、「引揚げ」における文学的考察を行うのは今後の課題としたい。

（3）植民地文化・引揚げに関する特集

次は植民地文化に関する雑誌・特集を紹介する。

▲ 「植民地文化研究」（研究誌）（不二出版、年一回発行）

▲ 「文学」特集（被占領下の言語空間）（岩波書店、二〇〇三年九月）

▲ 「アジア遊学」（16）特集（帝国崩壊とひとの再移動：引揚げ、送還、そして残留）一四五号（勉誠出版、二〇一一年九月）

「植民地文化研究」では、「豊富な資料と犀利な分析で近代日本のあゆみを地球的視野から、とくに亜細亜太平洋の視野から捉えなおす研究誌」と書いてある。内容的にいうと、戦中における日本植民地文化・文学を中心とする研究誌である。創刊号から二〇一二年七月発刊した十一号まで、「満洲国文化の性格」と「近代の日本と台湾」という二つの「特集」が連載している。このほかに、朝鮮、インドネシア、モンゴルにおける植民地文化にかかわる論評もある。この十二号を全体的に見渡すと、やはり戦中を中心としているものである。引揚げ問題などの敗戦後の問題につい

て、ほとんど触れていない。

次の「文学」の特集は主に占領下の検閲問題と、被占領下の戦後の日本文学の行方を検討したものである。

「アジア遊学」の特集では、満洲、台湾、朝鮮、南洋などからの引揚げ者の体験記や、研究者の論評が掲載されている。敗戦による引揚げ、送還或いは残留問題など、戦後の人の再移動について、幅広く収録しているが、引揚げに関する文学問題に言及していない。

これらのほかには、引揚げに関する論評は数多くあるが、ほぼ歴史関係、社会関係から考察するものなので、ここでは、これらの分野の論評を列挙しないこととする。

(3) 研究論文・インタビュー

次は単発の研究論文を見よう。引揚げ文学、または引揚げた文化人について、書いたのは、

- 本田靖春「日本の『カミュ』たち——「引揚げ体験」から作家たちは生れた」(特別企画 インタビュー・ルポルタージュ) (『諸君』 十一巻七号、一九七九年七月)
 - 西原和海「戦後日本の満洲ネットワーカー引揚げ文化人を中心に」(『社会文学』 十七号、二〇〇二年)
 - 朴裕河「引揚げ文学論序説——戦後文学のわすれもの」(『日本学報』 第八一輯、二〇〇九年十一月)
- などがある。

順に内容を紹介してみる。

(a) 本田の特別インタビューについて

本田の特別企画インタビューは、文学界・漫画界・映画界で活躍している作家、漫画家、脚本家(監督)の中から「旧植民地育ちの引揚者十六人」をインタビューし、それをまとめたものである。これらの「表現者」の心における「引揚げ」の重い存在について、本田は次のように述べている。

偶然ということはできない。おそらくは一人一人の深部に引揚げ体験が重苦しくわだかまっているのではないか。そして各自の表現は、取りも直さず、その「後遺症」であるに違いない。

本田は、引揚げ体験がこれらの引揚げ文化人に与えた人生における重さを「後遺症」と表現している。いくら時間が経っても忘れられないほど、引揚げが彼らの頭に刻み付いているのである。このインタビューの対象者は昭和三年から昭和十二年までの生まれの人に限定している。つまり、引揚げ体験が「少年期」であることを前提している。これは、川村の語った「子供たちの満州」と同じ意味があると私は思う。

(b) 西原の論評について

西原の論では、満洲から引揚げてきた文化人が、戦後日本において、特別な存在だと認識し、これらの文化人の自身の体験が、戦後日本の文学・漫画・映画・スポーツなどのさまざまな分野に影響を広がっていると指摘している。また、七点の文芸同人雑誌¹⁷を紹介し、引揚げ満洲文化人によるネットワーク編成の様態を探ってみた。これらの文化人は戦後日本の各分野において人的ネットワークを形成し、相当の社会的影響力・支配力をもつことを指摘している。

(c) 朴の論文について

朴はこの論で、「引揚げ文学」概念の不在を指摘し、文学辞典や研究書¹⁸の類の中には〈引揚げ〉に関しては皆無と言っているほど触れられていないと指摘している。そして、外地で少年時代を過ごした作家をリストアップし、文学賞を受賞した状況をも確認した。その後本田のインタビューの中の文化人の発言を引用し、「引揚げ者の意識」について説明した。最後は、「引揚げと女性」の視点から、引揚げ文学におけるジェンダー問題も少し触れている。また、戦後の日本文学を考える糸口として、引揚げ文学について、これまで文学的研究が少ないことを強調した。これは、これまでの研究より、「引揚げ文学」という概念を明らかに意識しているところであろう。

ここで挙げている三つの論評の中の二つ、西原と本田の論文は、主に満洲からの引揚げ派文化人に注目するものである。朴の論文

は「引揚げ文学」をジャンルとして初めて提唱したものと見られる。

以上挙げた単発論文をまとめていうと、引揚げ文学は、一九七〇年代から、徐々に研究者の視野に入りはじめたのである。また、かつての引揚げ者である現在の文化人（作家、漫画家など）の集団は、同じ体験によって、戦後から何十年以上経ってもお互いに心の中のかつての重い思いに共感を呼んでいるのである。

さて、以上見てきた引揚げ文学にかかわる著書や論評についてまとめてみたいと思う。

一九七〇年代から、引揚げ派作家が注目され始め、これらの作家たちの特質をまとめた研究が出はじめた。

川村などの研究者は一九九〇年代から、満洲文学の問題を考えなおすことよって、昭和文学の要素として取り上げ始めたのである。その中で、引揚げ作品についても、注目し始めたのである。

以上のようにまとめてみると、「引揚げ文学」という概念は同じ戦争関連の原爆文学¹⁹や反戦文学²⁰と違って、文学ジャンルとしての独自性がまだ、研究者に十分に意識されていない。戦後文学においても、旧植民地文学においても、「引揚げ文学」の重要性を検討することが必要だと思ふ。

朴の研究は、本研究と関わる部分があるから、次の節でもう一度取り上げてみる。

三、「引揚げ文学」の提起——文学と実録

朴は、「引揚げ文学」の概念の不在を強調した上で、「引揚げ文学」という概念について次のように定義している。

本稿では、日本の戦後文学に引揚げ体験および引揚げ体験の後遺症とも呼ぶべき素材を取り扱った表現者たちが多数存在したことを改めて指摘し、彼らの試みを「引揚げ文学」と命名しておきたい。そして「引揚げ文学」が戦後日本と日本文学を考える際極めて重要な立脚点になりうるという前提の上に、「引揚げ文学」の概略図を示しておきたい。

川村の「引揚げ」文学・記録に関する論では「引揚げ小説」、「引揚げ精神」という用語が出てきたが、「引揚げ文学」は出てこない。川村より前の研究でもこの用語は出てこなかった。朴がはじめて「引揚げ文学」という概念を提唱したのである。朴の論は、引揚げにかかわる文学研究の重要性を示し、戦後の日本文学を考える新たな視点を提示している。

引揚げ文学の定義にかかわる引用の中には、「表現者たち」と「試み」と二つの言葉を使っている。朴の論から考えてみると、「表現者たち」は、「戦後文学に引揚げ体験および引揚げ体験の後遺症とも呼ぶべき素材を取り扱った人たち」のことを指している。「試み」というのは、戦後文学におけるいわゆる表現者たちの書いた

文学作品を指すと理解できるだろう。この「表現者」という用語は本田からの影響を受けていると考えられる。だが、本田のいう「表現者」の意味とやや違っているようである。本田の場合、作家、漫画家、脚本家といろいろな職業を含んでいる。朴の場合は、「彼らの試みを「引揚げ文学」と命名しておきたい」とあるから、表現者と呼ばれる「彼ら」は、文学作品を書く作家だけに限定しているだろう。つまり、朴の研究は引揚げ文化人における「文学者」のことを注目しているのである。

確かに、引揚げ文学はこれまで戦後文学の一環として、注目されてこなかった。このジャンルにおける研究は戦争文学や、植民地文学に関わっているため、これらの類と一緒に取り扱ったのであろう。しかし、引揚げは、戦争中或いは植民地支配と異なった性質を持っている。戦争中なら、日本は支配者の立場であったが、敗戦後、引揚げを始めた時、日本或いは引揚げを体験する日本人は戦争による「被害者」になった。身体的な移動のほか、心理的、立場的移動もあるだろう。そのため、文学作品でもこのような変化が現れるはずであろう。

尾崎は、作家たちの体験に注目した。川村は、「引揚げ精神」ということを指摘し、「個人」を守ろうとする気概であり、一切の通念や常識や制度的な思考を本質的には信じてないという態度であるという。

ところで、「引揚げ文学」という用語をはじめて使ったのは朴である。私は、朴の論文を踏まえて、これからどのように引揚げ文

学を考えるのかなどについて述べたい。

④ 朴の定義では、文学者の引揚げに関わる文学作品を「引揚げ文学」と指摘しているが、膨大な数がある体験記をどう取り扱うのかについて、言及しなかった。私は「引揚げ文学」を考える時、体験記、すなわち「実録」の位置づけ問題も含めて考えなければならないと思う。

⑤ 朴の論文は「引揚げ文学」概念の不在を指摘することに重点があるように思う。概念について、個々の作品を考察することによって、検討し直す必要があると私は思う。

⑥ 「引揚げと女性」について、朴は成田の論を踏まえながら、引揚げをめぐる体験記の多くは女性たちによるものと指摘している。また「引揚げ文学」におけるジェンダー問題も提示している。これも、個々の作品、個々の主人公の描写に基づいて、検討を始める必要があるだろう。

「引揚げ文学」という大きな課題には、数多くの小課題が含まれている。引揚げ文学におけるジャンル分け、作品解説、引揚げ作品と作家の関係といったようなさまざまな問題が関わっている。また、「引揚げ文学」の定義の問題について、一言でまとめられないと私は考える。川村や朴の研究では、「引揚げ体験手記・記録」類についての言及はなかった。つまり、引揚げを題材とした文学作品を視野に入れているが、膨大な数がある引揚げ体験記録・手記の位置づけ問題にまだ注目していない。

引揚げの体験記と文学作品をどのように取り扱うのかについて、その境界線は簡単に指摘できないと見られる。それは、芸術作品（小説）と記録・手記を区別する問題だといってもよさそうである。ここで文学作品と体験記のそれぞれの特徴について簡単にまとめてみる。

まず、小説から見ておこう。小説を構成する要素は一般的に「背景」、「人物」、「事件」の三つがある。しかも、小説は芸術作品であるため、必ず作家の創作による芸術的要素が入っている。事件の伏線、山場、終結部が作品において、それぞれ見出すことができる。しかも、登場人物の心理描写もよく作中に描かれている。

読者は作品を読んでいるうちに、これらの要素を自然に分かることができるといえよう。作家は芸術制作の手法で読者にこの物語は虚構のものだと分かってもらっている。また、物語を通じて、読者たちに共感させるものは小説だといえる²¹。

一方、体験記の方はどんな形になるのか。一つの例を挙げて見ておこう。梁禮先・矢野一弥『満洲鎮魂』（インパクト出版会、二〇〇一年一月）は、矢野一弥の口述を梁禮先が筆記してまとめた体験談である。中では矢野の生い立ちから、戦後五〇年ぶりにまた、「満洲」に墓参りに行ったことを細かく記録しているし、さらに各年代の写真や地図も掲載して、詳細に紹介している。また、本の「序」と「あとがき」において、この体験談を書く経緯、経験者の証言などはつきり書いてある。これまで体験手記はほとんどこのような形である。

小説と体験記の狙い（出発点）を言ってみると、一般的に作家は作品を通じて、人生にかかわる深層問題を述べたいのである。これに対して、体験記を書く人は、つねに過去の時代を回想している姿勢が見える。そのため、体験記はほぼ過去の体験を通じて、「平和を祈念」「不戦への祈り」などを着目点とする。つまり今の時代で過去のことを振り返り、さらに未来を祈るのである。両者の出発点は異なっているだろう。

また、叙述から見ると、体験記はおおむね時間軸にそって、語ったものが多い。つまり、自分の経歴をそのまま年代順によって記録するものがよく見られる。これに対して、文学作品はその傾向は強くない。もちろん、すべての文学作品は時間的な表現が弱いとはいえないが、大多数の作品では、記録のように時間順の強い表現は少ないといえるだろう。

以上に基づき、引揚げにかかわる文章について、文章の表現・描写における違いを心がけて検討すべきではなからうか。これまで、「文学と実録」というジャンル分けの問題はまだ論じられていない。同じ事件、同じ体験から生まれた「文学作品」と「実録」をどのような関わりがあるのか、それぞれ描かれた世界は同じかどうか、文学的にどのように評価するのか、というような問題がたくさんある。今後の研究課題である。

四、今後の展望

引揚げの「悲惨さ」の原点は戦争であるのはいうまでもない。佐藤のいうように、戦争は生きのびた人、死んだ人、残された人のいずれにも「深い傷」を残しているのである。とくに、祖国に引揚げてきた人がどのように戦争をふりかえっているだろうか。戦争は彼らにとってどんな意味があったのだろうか。どのように位置付けられるのだろうか。引揚げ体験・戦争体験は引揚げ者たちの人生にどんな影響を与えて、この影響はどのように作品の中に反映していたのだろうか。「引揚げ者と戦争」間、さまざまな課題が残されている。

このように、引揚げ文学作品の中に「戦争」がどのように表れているのか、という問題は、引揚げ文学全体に対して、軽視することのできない問題といえるだろう。

具体的にいえば、文学作品に登場された人物の中に女性、少年が多いのである。なぜ女性や少年が文学作品の主役になっているのかというと、引揚げ途中に男性が少なかったことや、「引揚げ」後の男性は生活に翻弄されたことなどが考えられる。したがって、女性や子供という、元々社会の主力ではない人が、引揚げ作品で主役の位置を占めている。このような社会的弱者の目から、「戦争」をどのように受けとめているのか、文学作品では、どう描かれているのかは、検討・考察する必要があると思う。

女性主人公がどのように描かれているのか、まず確認することが必要であろう。今後はその作業から始めたいと思う。引揚げという大きな背景の下で、作品における女性主人公の有り様を探求

することによって、引揚げ体験を浮き彫りにすることができるのではないかと考える。

〈注〉

- (1) 厚生省社会・援護局編『援護五十年史』(ぎょうせい、一九九七年三月)ほか、若槻泰雄『戦後引揚げの記録』(時事通信社、一九九五年十月)も参考にした。
- (2) これまで読んだ引揚げ関係の作品を見渡すと、これらの要素をとり出すことができる。
- (3) 梅田博「抑留同胞・引揚げの概観と諸問題」(『政治経済』一九五一年九月号)
- (4) 「いまだ帰らざる三十四万人―引揚げ問題の実態をつく」(『地上』一九五一年十一月号)などの歴史関係の論文が挙げられる。
- (5) これまでこの種の「目録」が極簡単なものがあるが、まとまった形のものはない。
- (6) 解説には、高杉と森繁の手記について、一部抜粋して収録していることが言及しているが、ほかの作品について明言していない。しかし、作品ごとに確認すると、この二作のほか、会田、藤原の作も一部分だけ抜粋して、収録しているのが分かった。
- (7) この全集に掲載されたのは、作品の一部だけである。
- (8) 「発刊に寄せて」には「新聞紙上を借りて全国に体験手記の募集を呼びかけると大反響をうけ、…」とあるが、新聞名は明確に書いていない。
- (9) 具体的な募集期間は示していない。
- (10) 初版表示なし。
- (11) なお、集英社より二〇一一年六月から「戦争*文学」シリーズが刊行され始めている。二〇一二年七月刊行された「さまざまな8・15」巻では、引揚げ関係作品が四篇収録されている。
- (12) 最初は「週刊読書人」(一九六九年二月)に掲載されたものである。
- (13) つまり、「貧しいゆえに外地に逃れ、その土地で他民族に対して支配階級の立場に立つ」ということを指す。
- (14) 彼らの人生の中では、「故郷」という概念は、失ったのではないだろう。彼らは、満洲へのノスタルジアを背負ったまま、戦後に生きているといえるだろうと私は思う。

- (14) たとえば、「引揚げと先行する移動の関係」、「引揚げの路線の多様化」、「引揚げの形態の多様化」などを提示している。
- (15) それぞれ藤原で『流れる星は生きている』、牛島春子「引揚げ作品群五篇」、望月百合子「いつの日か帰る夢のふるさと」三篇である。
- (16) 本特集は、日本帝国崩壊後の人の移動(引揚げを指す)を今日の視点から特集するものである。
- (17) つまり、「みなと」、「満蒙引揚文化人」、「河畔」、「雲」、「文話」、「文通信」、「作文」という七点の雑誌である。
- (18) 具体的にどのような辞典や研究書を参考にしたのかは明言していない。
- (19) 広島、長崎への原爆投下(一九四五年八月)という不条理で未曾有の悲劇を記録し、鎮魂し、被爆者のその後の運命をたどり、あるいは、核戦争の危機を内包した世界秩序の擬制の内に、現代人の置かれた本質的状況、作家の想像力の根源にあるべきものを読み取ろうとする文学全般を指す。
- (20) 戦争に反対する文学全般を指す。
- (21) 引揚げ関係の文学作品は安部公房『終りし道の標べに』(真善美社、一九四八年十月)、木山捷平『大陸の細道』(新潮社、一九六二年七月)、宮尾登美子『朱夏』(新潮社、一九八五年、六月)などが挙げられる。これらの作品は作家たちが自分の体験を元にして、文学的手法で制作した虚構なものと思われる。

主指導教員(鈴木孝庸教授)、副指導教員(橋谷英子教授・広部俊也准教授)